

ニホンヤマネ *Glirulus japonicus* は、樹上性の齧歯類で日本固有種の国指定天然記念物である。本種は、食餌、休息、繁殖といった活動期の生活の多くを樹木に依存している。しかし、本種の生息環境に関する詳細な知見は十分に進んでいるとは言い難い。一方で、森林の開発により本種の生息環境が損なわれ、有効な保全策を図ることが急務である。そこで、本研究では本種が必要とする生息環境の条件を解明すると共に、保全策の検討を行った。

まず、活動期のニホンヤマネの休息場所について発信機を用いて調査を実施した。そこで、3頭のニホンヤマネの追跡結果から頻繁に朽ち木を利用していることが明らかになった。森林内で、朽ち木の存在率が約 25%であったが、3頭の内 2頭が 50%以上朽ち木を利用した。朽ち木は活動期のニホンヤマネにとって重要な休息場所であり、生息に必要な環境条件であることが示唆された。

次に、活動期の休息場所の空間選択について調査を実施し、ニホンヤマネが休息に利用した部位をより詳細に検討した。本種は休み場所として樹上を多く利用し、生木と完全な朽ち木の利用を比較では完全な朽ち木を選択的に利用した。樹木の利用部位については、生木の場合には枝を、完全な朽ち木の場合には主幹をそれぞれ多く利用することがわかった。隙間と樹洞の利用比較では、隙間の利用が多かった。枯死部は、非枯死部より多く利用されることがわかった。生木と完全な朽ち木、そのいずれの場合でも隙間利用より樹洞利用の方が胸高直径の大きな樹木を利用することがわかった。このことより、森林内の隙間や枯死部などの他の樹上性哺乳類が利用しない場所を有効に利用していると考えられた。

さらに、本種の繁殖期の巣について調査を行った。36個の巣の内、35個が樹上であり、テングス病の部位に作られていた。地上高は  $1.85 \pm 0.79$  m (平均±標準偏差) であった。繁殖巣は球形あるいは楕円形で、その大きさは長径  $11.1 \pm 1.8$  cm、短径  $8.8 \pm 1.4$  cm、高さ  $9.8 \pm 2.1$  cm であった。巣は幾層にも巣材を編み込む構造で、主要な巣材は蘚苔類と樹皮だった。ニホンヤマネは繊維質に富むサワフタギの樹皮を選択的に用いた。巣の外壁には蘚苔類を用い、内壁には樹皮を主に使用した。その巣の構造と材料は防水性、安定性そして天敵からの巣の隠蔽といった課題に対処できるものであった。出産期はおおよそ 6月中旬から 8月下旬で、産仔数は 3-5頭であった。

日本を含む世界の各地には道路や線路などのインフラストラクチャー整備で分断される森林が急増しており、それによって野生動物の移動、繁殖、餌の確保等が困難になっている。この状況を改善するために、筆者が所属する研究グループは 1998 年から森を分断する道路上での樹上性動物の移動経路の確保について検討し、2007 年からそのための架設物をアニマルパスウェイと称し設置してきた。2013 年までに山梨県にはプロトタイプを含む 3 基、栃木県に 1 基、愛知県に 1 基が建設した。建設後、保護の対象であったニホンヤマネを始め、ニホンリス、ヒメネズミそしてニホンモモンガの利用が確認された。山梨県北杜市の 2 基においてモニタリングを継続実施し、その有用性が確認された。

今後、生態調査によって解明された結果を元に、保全対策に取り組んで行くべきであると考えます。